

# 古墳の内部施設と外部施設に対する予察 －木津川市西山塚古墳の一枚の断面図から読み取る－

伊賀高弘

## 1. はじめに

ここに1枚の図面を提示する(第2図)。

この一枚の図面から、読み取れることをメモし、勢い古墳築造論に踏み込んでみたい。

現在の木津川市(調査当時は相楽郡木津町)に所在した西山塚古墳の墳丘の断面図である(第1図)。

この古墳については、関西文化学術研究都市の開発にともなう事前調査として1991年に現地調査を実施し、その成果については概要報告書にて簡略に報告している。<sup>(注1)</sup>

調査計画の初期の段階では、処理に時間を要する漆製品(革盾など)の分析を待つかたちで報告書の刊行を計画していた。しかしその後、諸般の事情が重なって、刊行の見通しが厳しくなるなか、この間に蓄積した情報の開示を何らかの形で実現する方法を模索し、ここにその発端を開きたいと考えた次第である。

個別の成果については、あらためて『京都府埋蔵文化財情報』などの雑誌を活用して、



第1図 西山塚古墳位置図

適宜報告していきたいと考えるが、本論では、現地で測量した1枚の大断面図を組上において標題に掲げた古墳築成論に検討を加え嚆矢を開くこととする。

さて、第2図の分析に入る前に、今一度、この古墳の概要を確認しておきたい。

西山塚古墳は直径約26mの円墳で、外部施設として埴輪列と葺石をもつ。埋葬施設は墳頂部にあり、長大な箱式木棺が収められた内部施設を中心において、合計3基の埋葬施設が営まれていた。築造時期は5世紀の後半である。

## 2. 墳丘の構築方法と埋葬施設の関係

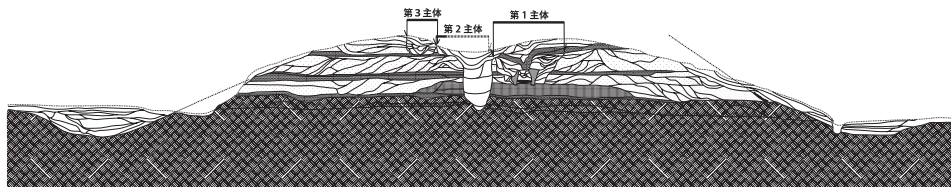
ここで、第2図に着目し、そこから読み取れる情報を解析してみたい。以下、築造の過程を、時間軸に沿って復元的に考察を試みる(第3図)。

[1] 西山塚古墳は、丘陵頂に形成された一定の面積をもつ平坦な地形のほぼ中央部を古墳築造の選地としている。このような立地環境は、平地の築造条件と変わるところはなく、全周する周濠を巡らせて、その内側に「掘り残された」基壇部分を墳丘基壇(基礎)とする。周濠の平面形は、円形を正しく指向し、縄などを使用したコンパスによる測地が想像できる。墳丘の規模は、周濠の掘削が下段墳丘の造形を意図したものと把握すると、周濠の内側の斜面(内傾斜面)は、墳丘の基壇部分を造形するための所作であるから、その斜面の下縁が墳丘の基底とすることができる。

西山塚古墳の周濠は、断面図でも明らかのように、横断面が「逆台形」を呈する。周濠の下底は、早くに埋積作用が働くことから、逆にオリジナルな形状をよく保持しているケースが多い。

古墳の築造法が定式化したこの時期において、古墳の要件を最大限に具備した典型的な古墳の場合、この最下段(周濠内傾斜面)にも葺石の表飾を施すケースが多い。西山塚古墳の場合、1ランク下位の外部施設の許容という事で、堅固で淘汰されにくい地山層(洪積層)を掘削して造り出された下段部分の葺石は省略された。

こうして、周濠により内部に残された下段墳丘の上位に、周濠掘削の際に排出された土を用いて盛土築成が行われるわけだが、その過程は、複雑な様相を呈する。



第2図 西山塚古墳 古墳断面図(東西軸)

[2] ところで、古墳の築造を開始する前に、墓域の選地後、墳丘が設置される範囲の表土層(築造直前の地表植生由来の腐葉土壌)を処理した可能性を調査所見から読み取ることができ

る。  
近年の調査事例では、京都府向日市に所在する元稲荷古墳の断面観察所見から、築造直前の腐葉土の排除と、基礎地業とも言うべき土壌改良の形跡が確認された。ここでは、古墳築造直前に、当時の地表土壌を堅固な基盤層まで削り取って、ここにコンクリートのように硬く締まった灰色系の土が敷き詰められていた。基盤は段丘礫層で非常に硬いにもかかわらずである。

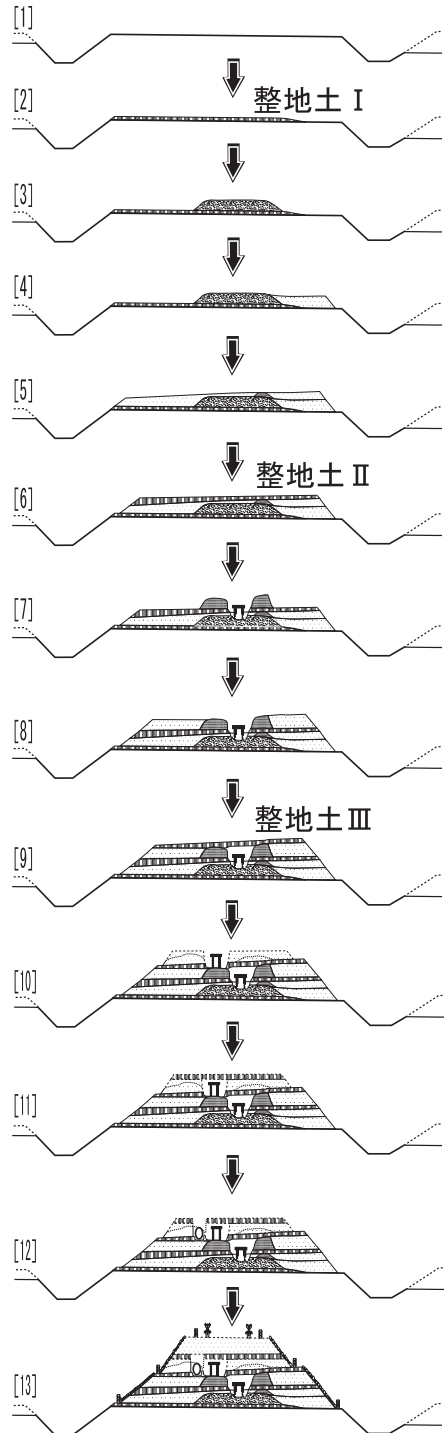
この層は、いわば、墳丘盛土のベースとなる性格を有するため「墳丘の基礎地業」と呼び変えても異存はないと思われる。

西山塚古墳の断面に目を移すと、大阪層群起源の非常に硬く締まった基盤層が直接空気に触れて風化し、かつ動・植物活動によって有機土壌化したいわゆる地表土は、まったくその形跡を認めることができなかった。

平坦地形とはいえ、標高的には地形の最高所に位置するため、降雨による削平や開析が進行することはあっても、地山上の自然堆積はほとんどないものと思われる。

これに代わって、基盤層直上を厚さ約0.2mの灰色系の土が一面敷き詰められ、土壌改良が行われたことが推察できる【整地土 I】。

[3] さて、西山塚古墳の場合、この整地土上に順次盛土がなされて墳丘を構築するわけだが、その最下部において墳丘の中心部分に小さ



第3図 西山塚古墳 古墳断面図(東西軸)

な小山が存在することが断面図から読み取れる。その三次元形状は不明ながら、一般に用いられた盛土とは明らかに異なる精選された土が均質に積まれたような構造をなす。

[4～6] 通常、築山を構成する人工的な盛土を施工する場合、盛土をする区画の外縁(外周)に沿って土堤を置き、これに現代の重力式擁壁と同じような効果を期待しつつ、その内側に順次土を寄りかけるように重ねて充填する手法が最も効果的であり、古墳時代に既に確立した技法である。但し、土堤の高さには限界があり、それが1mを超えるケースは稀である。

西山塚古墳の場合、土堤の高さは約1mであり、この土堤の上面までをひとつの施工単位として土を盛り上げると、一旦盛土築成作業を休止し、上面を水平に均して、さらにその上位に地山上の土壌改良に用いられた土と近似した灰色系の土が厚さ0.2mにわたって敷き詰められる【整地土Ⅱ】。

[7] この後、時間的な休止過程を経て、さらに土堤を抛り所にして、その外側面に順次土を被せるように重ねて築成作業を継続する。

ここで注意すべきことは、この古墳の造墓の契機をつくった人物の埋葬施設(第1主体)の構築が、この段階で実施されていることである。第1主体は、長大な木製の板材を長側辺に用いた「箱式木槨」(厳密には「箱式木槨」と言うべきか)を、墓壙内に組み付けた構造を呈する。この施設の構築は、整地土Ⅱの上面を作業基礎面として、そこに木槨を造り付けるための掘形を穿つ。掘形は木槨の外寸を僅かに大きくした平面規模で、長側板を掘形内に据え置いた後、その外周側を埋め戻して側板を自立させる。木槨内部は4枚の仕切り板により3つの空間に仕切られるとともに、側板が内部に倒壊することを防止している。

墓壙の横断面を子細にみると、整地土Ⅱを境にして、その上下でその傾斜角が変化するとともに、整地土Ⅱ上面に相当する高さに狭いテラスを設けて、結果として二段墓壙状を呈するようにみえる。

整地土Ⅱよりも上位にある墓壙の上半部は、実は、墳丘盛土の土堤に該当する。つまり、この墳丘盛土内の土堤は、主体部1の長側辺に沿って構築された2条の平行する土墨状の土堤が「Ⅱ」字状に配置されている。これが短側辺に回り込んで小口を閉塞していたかどうかは、埋葬施設の主軸断面の所見によると、その存在は消極的である。小口は開放されていた可能性が高い。このような構造は、果たして「墓壙」と呼べるのかどうか疑問を感じるが、墳丘の構築と埋葬施設の設置の関係を示す興味深い事例といえる。

[8・9] 墓壙側土堤を基礎にこれによりかけるように順次盛土施工されて、さらにその上面が平坦に整えられた後、再び灰色系の土による水平基調の整地がなされる【整地土Ⅲ】。

ちなみに、調査時点においては、主体部1の木槨は、棺材の腐朽にともない内部空間が陥没し、それに引きこまれるように整地土Ⅲは木槨上で大きく「U」字形に落ち込む状況を観察している。

[10～12] 整地土Ⅲをベースにさらに盛土作業が上位に向かって進行するが、調査時点においては、これより上位の墳丘の浸食・削平が進行しており、その状況を具に観察することは叶わない。

大半が攪乱を受けていた第2主体(その構造は不明)や、重複関係からそれよりも新しい第3主体(両小口を礫塊閉塞した割竹型木槨を直葬したものは、両者とも墓壙の下部は整地土Ⅲを僅かに掘り込み、それより上位の壁面の傾斜が緩やかになることから、第1主体同様、長側辺に土塁を構築して造っている可能性がある。

[13] 全ての埋葬行為が完了したのち、最終盛土が実施されて墳頂部が整えられ、外部施設(葺石・埴輪列)が敷設されるものと考えられる。

### 3. まとめ

本論は、考察を進める前段のスケッチにすぎないが、古墳は寿陵であるかどうかを議論する上での糸口を提供できたとともに、次の論点を議論する上で一つの検討資料を提起できたと思う。

結論の本旨を要約すると、古墳への埋葬行為が墳丘築成過程の中で執り行われた可能性をここでは強調しておきたい。既往の通説的な解釈では、墳丘の築成を終えて、墳丘の外飾(外部施設)が整備された後、つまり、古墳の外観が整った後に、この古墳を営む原因をつくった人物に対する埋葬とそれに伴う儀礼行為が実行されたとみる。

確かに、長大な埋葬施設を構築する段階で、墳丘の各段斜面の葺石と、段間テラスの埴輪列が完備されていると、内部施設の設置及び儀礼行為に対して、物理的・観念的に著しい困難が伴うであろう事は容易に想像できる。

墳頂の表飾が、埋葬行為終了後の所作であることを否定する見解はないが、墳丘斜面以下の外部施設施工と時間的な差異を証する積極的な根拠を示すのも難しいであろう。

本節に触れたが、西山塚古墳の場合、3つの埋葬施設が、墳丘の築成過程の時間的に異なる段階で営まれている事が明らかとなった。

そして、少なくとも最初に構築された第1主体が造られ、そこで一連の埋葬行為が執行され、埋め戻された時点で、墳丘はまだ完成していなかった。

テラス面の埴輪樹立と墳丘斜面の葺石の敷設が、どこの段階で実行されたかについては、残念ながらこの古墳の調査所見から議論することは難しい。

この点に関し、興味深い調査事例があるので、これで補完しておこう。

木津川市上人ヶ平5号墳<sup>(注2)</sup>および城陽市丸塚古墳・同市梶塚古墳<sup>(注3)</sup>の調査所見の引用であるが、墳丘第1段から第2段にかけての調査により、埴輪と葺石の施工法と墳丘築成の相関を検討する上で有用な資料が得られた。

ここに引用した古墳の段築テラスに設けられた埴輪列は、隣接する埴輪の樹立間隔は狭く連接するように並んでいたが、三古墳とも円墳であるのに、埴輪列の平面プランをみると、正しく円を描かず、多角形状を呈する。

図形上で多角形を構成する各頂点に位置する埴輪は掘形を伴い、その間を充填するように各辺を構成する埴輪の底部レベルは埴輪のタガ状突帯1段相当分高く据えられる。

この充填された埴輪は掘形を持たず、テラス面の最終整地土(化粧土)により埴輪の最下段部位まで埋めることで固定されている。

充填された埴輪の樹立固定とテラス上面の最終整地に提供された土層は、そのまま第2段墳丘の葺石施工の裏込め土に層位的に整合する。つまり、ここでは埴輪(少なくとも充填埴輪)と葺石の施工の同時性が確認できたわけである。墳丘構築の最終段階で、外部施設が整えられたことを証明できる要素となろうか。墳丘外装(外部施設)と内部施設の施工順を議論する上で参考資料となるものと思われる。

一枚の断面図から、勢い古墳の築造論に踏み込んでみた。盛土古墳(真の「高塚」)の墳丘を中心を貫通するような断ち割りの断面を得た調査事例はまだそれほど多くはない。

一つの状況を分析したに過ぎず、今後は資料の収集を進め、類型論、系譜論に進化させてあらためて文を起こすこととし、ひとまず擱筆したい。

(いが・たかひろ = 当調査研究センター調査第1課主査調査員)

注1 伊賀高弘ほか「木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)1992

注2 伊賀高弘ほか『上人ヶ平遺跡遺跡 京都府遺跡調査報告書』第15冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991

注3 伊賀高弘ほか「久津川車塚古墳・丸塚古墳発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集 城陽市教育委員会)1986

注4 伊賀高弘ほか「久津川遺跡群発掘調査概報」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集 城陽市教育委員会)1986